



ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(7)

～ 混乱からの脱出～

中村周平

今回は、在宅生活を始めてから一年が過ぎ、復学した高校での様子について触れていきたいと思います。多くの不安を抱えながら高校への復学を考える中、施設面における課題や人間関係で、これまでとは違った壁にぶつかることとなります。また、自身の事故の経緯については聞く度に二転三転していき、学校やラグビー部への不信感はさらに大きなものとなっていくことに。

前回までと同様に、「私へのインタビュー」、「両親へのインタビュー」で交わされた会話の内容を手がかりに、当時の私と両親の心境についても書き出していきたいと思います。

以下、表記は筆者=S、北村さん(インタビュアー)=I、父親=T、母親=Hとする。

4 ひと時の高校生活

1) 高校への復学

事故から1年半後の2004年4月、高校に復学することになりました。在宅での生活にも慣れ、トレーニングの毎日を送っていた頃で、最初は、この復学のことで大変悩みました。ただ、家にお見舞いに来てくださった高校のある先生が「君はもう十分単位を満たしているから、復学しなくても卒業できるよ」という言葉が心に引っかかりました。それは私の身体を気遣った言葉だということにはわかっていました。しかし、ラグビーと勉強の両立を目指し、奮闘していた高校生活。それが事故によって最後まで通わずに、ただ卒業証書をもたらすだけでいなくなってしまうことに納得できない何かがありました。また、このままいなくなってしまうことで、私の事故はさらに風化してしまうのではないかと不安もありました。

ただ、怪我をする前と同じように通うためには難しい問題がいくつか存在していました。まずは、私の通っていた高校が車いすで通うには、あまりにもハード(施設)面が厳しかったということです。怪我をする前、自転車を降りて押さなければとても登ることのできなかつた校門からの急な坂道は、車いすの私にとって一つ間違えれば、命を落としかねない危険なものでした。また、玄関前の階段、校舎間の段差、エレベーターのない校舎など怪我をする前まで何でもなかったものに、行く手を阻まれることになりました。その後、復学に向けて高校と話し合っていく中で、通学には介護タクシーを使用すること、校舎へは既設のスロープを使用して入り、一階の入り口から一番近い教室を割り当ててもらうことが決まりました。実現は困難だと思われたエレベーターも、話し合いの末、設置してもらうことができました。また、以前と同じように授業を受けることが難しかったため、各教科を担当して下さる先生方が、授業内容を私でも答えられるよう工夫して下さいました。

こうして、週2日、しかも1日2時間という限られたものではありましたが、私の高校生活が再

スタートしました。1年間休学していたことで、私の同期生は3月に卒業してしまい、1学年下のクラスで高校生活を送ることとなりました。突然復学してきた車いすのクラスメイトを、周囲はなんとか迎えようとしてくれていました。しかし、ラグビー部の後輩以外、誰一人顔も名前もわからないクラスで過ごす時間は非常に辛いものでした。そのためか、私から打ち解けようと行動を起こすこともできず、それを感じ取ったクラスメイトも積極的に関わろうとする人はいませんでした。休み時間も介助のため来てくださっていたヘルパーの方と二人で過ごすことがほとんどでした。唯一、当時ラグビー部のマネージャーをしていた後輩が気軽に話しかけてくれました。彼と話している時だけ、高校生活を実感することができました。

2) 補償をめぐって、調停に至るまで

「自分の事故のことはしっかりと調べてくれている」。そう思っていた私にとって、監督の「何もわからない」という言葉は裏切られたと思う以外の何ものでもありませんでした。不安は一気に「不信感」へと変わっていきました。その後、事故が起きた試合の笛を吹いていたコーチの方が私の家を訪れた際、両親が事故の経緯について知っていることを話してほしいとお願いしました。そのコーチから話された内容は、私の記憶とも、監督が言っていたこととも、異なるものでした。「これはおかしい、本当に事故はちゃんと調べられているのだろうか」。両親と話し合い、事故後ラグビー部内でどのような話し合いがおこなわれたのか話してほしいという願いを、再度監督に伝えました。その後、以下のような返事がありました。「事故後、その場にいた指導者5人で数回にわたり話し合い、パスをしてうつ伏せに倒れ込んだところにパスを受けたプレイヤーが相手プレイヤーからタックルを受け、首の上に倒れ込んだ」という結論に至った。その場にいた選手、見ていたOBらにも数人聞き取りをおこなった。病院で『お前の首の上に乗ったのは や』と言ったのも、 本人が『もしかしたら僕が乗ったか

もしません』と伝えてきただけで、確証はとれていない。これだけ大きな事故が起きたにも関わらず、私の事故に関する記録は口頭での話し合いと数名へのヒアリングだけで作られた「事故報告書」しか残されていないことが分かりました。さらに、その後、その話もまた二転三転していきます。

「本当のことが知りたい」。監督やコーチが答えてくれないならば、あの場にいた選手たちに聞くしかないと思いました。1年遅れで復学したために周り是一年下の後輩ばかりでしたが、その後輩たちにある文章を送りました。「事故から2年が経とうとしているが、私自身なぜこのような事故が起きたのか全く分かっていない。2年前の11月17日、一体何が起きたのかみんなが知っていることを教えてほしい。これは決して犯人探しをしているのではなく、私は真実が知りたい」という内容でした。事故から2年が経とうとしており、私の記憶も事故当初と比べて霞みつつありました。「答えも返ってこないかもしれないが、あの事故はなぜ起きたかを一緒になって考えていってくれる、二度とあのような事故を繰り返さないというきっかけになってほしい」という思いでした。しかし、私が文章を渡してほしいと一任した当時のキャプテンは、内容を見て、これは自分一人では判断できないと考え監督に相談し、最終的に私の首の上に乗ったと考えられている生徒への精神面を配慮することが優先されました。結果、文章が選手たちに配られることはありませんでした。

I: 「その友達に対してとか、一切ないわけや？首の上に乗った子とかにどうか...それについてはなにもない？」

S: 「その話を進めていく中で、何故原因を追求できないかっていう話になっていった時期が調停の前にあったんですね。僕の事故があったあと、その子は責任を感じて、二週間ほど学校に来なかった。それで先生というよりもその子の同期ですよね、そのメンバーが電話かけたりとか、家に行って話をして」

I: 「その男の子の？」

S: 「はい。ちょっとずつ来れるようになった。それで今やっと毎日来れるようになったときに、この話はできひん...原因究明とか。でも家族と不思議に思ったのが、学校側として、事故にあった人間もいれば、事故に関わったメンバーも確実にいるわけですよね、加害、被害というわけではなくて。その子に対しての心のケアみたいなものは、学校側から殆ど無かった」

I: 「事故に関わったメンバー？その上に乗った子も含めて？」

S: 「形としてなにか話をしはったと思うんですけど、そういうときってその子の支えになったのが同期のメンバーが『君のせいじゃないよ』と」

I: 「その自分が乗ったかもわからへんって子は君のところに来たわけ？」

S: 「その後1回か2回ですかね、リハビリを手伝いに来てくれて」

I: 「それは同級生？」

S: 「年下です。(中略)1年の終わりから...だから(ラグビーを)始めて半年かそれぐらいですかね」

I: 「だから学校としたら、まあそうやって一緒にプレーしてた生徒のことも考えて、なかなか原因がどうやこうやっていうのはしにくいって説明やったんや？だけどその割に、その子らに対して学校は別になにかしたわけではない、何にもやってへんことがあとでわかって、どういうことなんやろっていう話になったわけやな？」

S: 「そうです」

そして、私や家族を最も落胆させる出来事がありました。一連の事故後の対応について、一度話を整理するため両親とラグビー部の指導陣に集まってもらい話し合いをおこないました。その際、事実確認のために使われたのが偶然机の上に置かれていた湯呑みでした。「ここでポイントができて、ここでタックルを受けて...」ラグビー部の指導陣は懸命に説明されているようでしたが、私や家族にとっては誠意を持って答えてくれるように思うことはできませんでした。湯呑みによって事故の状態を表した話し合いの後、監督や

コーチからの連絡が途絶えました。「まさかあれで終わってしまうのでは」、こちらから連絡を取ったところ、翌月の頭に話し合いの場を設定するという連絡がありました。当日、監督と教頭が来られ、話し合いが始まりました。今回は紙面によって事故の状況が説明されましたが、その内容もこれまでの話とまた異なるものでした。

S:「そのあとの流れって...その湯のみのことがあったやんか。でその後調停に行き着くまでなんやけど」

H:「それが2004年の6月の話やんねえ。で監督が持ち帰ってもういっぺんって言うたんやけど、なかなか、返事が無くて、無くて、無くて...こちらから問い合わせで最終、7月の頭に持ってきはった答えが紙に書かれたもので、これまでの話のどれとも違った。というのと、当時の教頭先生と一緒に来てて、監督が『もうこのことについては、今後一切、学校では検討しない』ということをお願い渡さって、周平が『じゃあ、僕はなんでこんな怪我をしたか一生知ることができないんですね。ずっとそういう疑問を持って生きていかなきゃいけないんですね』って。それに教頭先生は『いや、事実はいつか分かる時が来る』って言ってはったのが7月の話」

「私の事故は、真実が明らかにならないまま闇に葬られてしまった」。その気持ちは今も決して消えるものではありません。

その後、ラグビー部との話し合いは打ち切られましたが、学校側と事故の補償について、話し合いを進めていくこととなります。卒業式の晩、成章高校の運営母体である、学校法人明德学園の理事長との話し合いの場が設けられました。

H:「そっからあと、しばらくは、そういうことについては空白の期間があったんやと思うわ。『話はない』って打ち切られて。であなたの卒業に関わって、『卒業=もう関係ないですよ』っていうことになっては困る。卒業したって、そっから先の人生のほうが長いんやし...ということで、卒業

式を前に理事長との面談を申し入れた。ほな、卒業式の日の茶話会の前に時間をもってくれることになったので...」

S:「全日空ホテルに行ったなあ」

H:「そう、そこで話したよね。それぞれの思いをしゃべって、理事長は『事故が成章高校のグラウンドで起きたことは重く受け止めてる』って言わはった。(中略)その時にいた、他の理事の方なんかは『言うてることはよく理解ができるから、ちょっと検討の時間が欲しい』とおっしゃったんやけど、年度が変わって、その方がいなくなるよね。で別の方が副理事長になって、待てど暮らせど検討の答えがないのでこちらから『お返事はどうなっていますか?』って聞いて、答えが帰ってきたのは2005年の5月か6月やったわ。当時の校長先生に『どうなっていますか?』と問い合わせして、ああいう返事やった」

S:「ああいう返事って?」

H:「一緒に聞きに行ったやんか、理事長室に。聞きに行ったら『学園としてできるのは、今の成章がやっているようなことを、系列の教職員に支援金をお願いすることぐらいだ』という話になって、それって『いつまでどんな形で』もはっきりしないなかで、今後の周平の支援にならんやんっていうとこで...あん時は周平自身も喋ったんじゃないかな?『納得がいかない』って。『学校で起きた事故なのに、僕の場合は目の前のお茶だって飲めない。そんな状態なのに』って。そこからあと、学校の判断は変わらないっていうことだったので、調停にするか、裁判にするかっていう話になって、弁護士先生と話を詰めていった。結局、裁判の形になったら、同級生も証人台に...っていうこともあったし、とりあえず、調停でっていう形になったのが、あなたの成人の誕生日を待って、その間に準備をして調停になったんじゃないかな?」

このころから学校側との話し合いに限界を感じるようになっていきました。